

しかし幸せな世の中がいつまで続くだろうか、誰がその保証が出来るか。過去の歴史は平和と退廃のあとに必ずおとずれる戦争と言う悲劇を私たちに教えている。

戦争ほど悲惨で残酷なものはない。私たち戦争体験者の一人一人が、戦争を知らない子供や孫たちに「二度と起すな戦争を」のために、残り少ない余生を燃焼させ、平和な時代が永久になることを祈念するものである。

## 北方四島の思い出

福岡県 野田 盛行

私は、男二人、女三人（妹二人）、五人兄弟の次男として、大正十一（一九二二）年三月に生まれました。祖母が健在で、叔父が一人同居しており、総勢九人の大家族でした。

大正期に吹き荒れたデモクラシーや大恐慌も我が家には関係なきがごとく、笑い声の絶えることなく、楽しい一家団欒だんらんの家庭でした。

家業は農業で、田と畑、合わせて一町五反歩くらい所有していました。米と麦を生産し、畑は桑園で、養蚕を盛んに行っていました。

近隣の人たちは親切で人情に厚く、真にのどかで平和な集落でした。

私は小学校の義務教育を終わると、中学校に進学しましたが、卒業前に中途退学しました。

当時、青年学校が義務教育化され、約二年ほど

通学しましたが、軍事訓練と関連の教育が主体でした。教官は退役将校の中尉の方でしたが、軍人らしく厳しさの中に秘めた優しさがあり、親切に教導されました。

おかげにて爾後、軍人生活上非常に有益だったことを覚えています。教育係助手には近隣で同町の子備役軍人の軍曹で、軍隊生活のことを詳細に、しかも表も裏も十分に教えられました。特に軍人勅語の五箇条は丸暗記にとどまらず、意味を理解するような指導は、後々、役立つものです。

昭和十七年、秋風が吹くころ、役場の兵事係より呼び出され、役場の会議室で翌日の徴兵検査についての説明や注意事項が話されました。

徴兵検査当日の徴兵執行官は佐官の方で、軍医さんや衛生下士官や衛生兵がおり、町長、警察署長、国防婦人会長などが列席していました。

自分たち三十余人は禪一本の裸です。逐次、名前が呼ばれて執行官の前に立ちました。「野田盛行、第一乙種合格」と命ぜられ、直ちに「復唱！

野田盛行、第一乙種合格、有り難うございました」と復唱して検査を終了でした。

役場の兵事係の方が全員に「酒はほどほどに飲み、女には手を出すな。出勤命令に備えて今日ただ今から十分心身ともに準備しておくように」との話がありました。このような注意を行うことは、過去に入営して、営門の中で身体検査を行う際、種々の不行跡が発覚（性的病気）して、「即日帰郷」になったときは、本人や家族はもちろん、町民、国民の罰だという時代だったからです。

私は当時、瀬高町産業組合（現農業協同組合）に入社しており、組合長や先輩各位からも十分、これらのことには気をつけてくれました。

第一乙種合格は即、現役軍人として入営することでした。こうして翌年の四月十日、久留米西部第四十八部隊へ入隊しました。（現役の軍人は入営といえます）。

入営の当日は古年兵が食事やその他万端の世話方を行ない「今日一晩は貴様たちはお客様だ。明

日からは十分鍛えたるぞ」といわれました。

青年学校で教えられたごとく、いよいよ地獄の始まりです。心を引き締めて就寝しました。翌朝、起床ラッパで飛び起きると、古兵が大喝一発「こらー初年兵、もたもたするな」と怒鳴っている。これから一期の検閲が終了するまでの約三カ月は力の限り怒鳴られ通しました。教官の秋山中尉は私的制裁撲滅を士官学校で実践されたとかで、一度も殴られたりされたことはなかったのです。演習や訓練より夕食後の「典範令」の教育のほうが大変でした。第一に「歩兵操典」次に「作戦要務令」それから一番忘れ易いのは「刑法懲罰令」でした。兵隊にとっては軍人勅語に次いで重要な三大典令でした。

私は人後に落ちることなく、第一期の検閲は終了しました。このときに人事係りに呼び出されて、中隊事務所、人事係り准尉殿から「野田、君は衛生兵になれ」といわれました。当時、兵隊仲間では一にヨーチン（衛生兵のこと）、二に喇叭、

三に炊事の当番でした。衛生兵とは戦場における危険度や歩兵本来の突撃もなく、病院関係ならば「看護婦さん」もいるし、とやれやれ助かったとの思いでした。

昭和十八年七月十日、久留米陸軍病院へ転属、下士官に引率されて、歩兵第四十八部隊に、「さようなら」をしました。

久留米師団管下の各兵科諸部隊より選抜されてきた衛生兵要員の集合です。引率の下士官から「歩四八出身だ、心して頑張れ」と激励を受けました。陸軍病院は立派ですが兵舎は古く、ガタガタでした。

軍医中尉が来て「君たちはただ今から当陸軍病院で一人前の衛生兵にする。そのため雑念を払い、誠心誠意、赤十字教育を勉強せよ」といわれました。衛生下士官と衛生上等兵と今一人、いかめしそうな古兵（二等兵）がいました。この古兵のために、自分たち六十余人が泣かされることになりました。原隊では私的制裁はなく、一生懸命頑張

って諸事を遂行しましたが、この衛生兵のために全員が苦しめられました。

彼は言う。「それぞれ本科のことを思って、やるのだ。歩兵ならば射撃、銃剣術、ほふく前進はい回り、蝟壺掘り、そして最後は突撃だ。皆生命を的にして頑張っているのだ。貴様たちは現役兵だ」と怒鳴られたものです。

翌日から朝礼後に点呼、朝食後は学科で、「衛生兵操典」を用いて第一ページから始まりました。人体構造、百八つの骨格、筋力、血管、大・小動静脈、皮膚の構造、各部位の呼称・名称などで「昔の医学者に勝るとも劣らないな」と感じたものです。

夕食後の古兵の私的制裁は誠に厳しく、二列に並ばせての「対向ビンタ」です。戦友対戦友で、少しでも加減をすると「こらー そのようなことでは駄目だ。力いっぱいだ」と言って、目の前の戦友を殴り飛ばします。互いに心でわびながらの殴り合いでしたし、古兵は得たり顔で立って眺め

ています。そして「腕立て伏せ、五十回だ」と、いろいろ考え出してやらせます。

十月十日、部隊長の査察がありました。そして半数の約三十人は原隊に復帰し、残りの三十余人は病院付衛生兵です。自分は少し算盤が出来ましたので経理の助手を命ぜられました。まるで地獄から天国へ、でした。

十一月十六日、軍令・陸甲第一〇六号で「壊第一二五〇五部隊、臨時編成・甲」が下令され、十二月二十三日、西部第八〇六〇部隊が同第一八五号により編成に着手、多忙の中でも、昭和十九年三月一日、この編成は完結されました。

このときに、人事係り准尉の宮原さんから内密の命令を受けました。それは「南方戦線で頭脳が病んでいる上等兵を治療不可能の傷痍軍人として自宅へ護送せよ」というものでした。住所、家族名などは内密ですが、彼は一切発言がなく、眼もトロンとしていて、まるで生きる屍のごとくです。誠に気の毒という以外に言葉を知りません。

このような大役を衛生一等兵に申し付けてよいだろうか、と思いつつも下車駅に着き、住所を尋ねつつ、本人に聞くこともできず、苦勞の末、家を訪ねました。玄関で、お呼びすると、母らしき人が飛び出してきて、病人に抱き付き、大声を上げて泣かれました。しばらく泣かれた後、私の顔を見て「ご苦勞さん、一人息子を国のために働かせて、このような姿で帰すのですか」と。可哀相で泣き伏す母にはお話しする言葉もありませんでした。

南方戦線ではマラリア、デング熱など悪病に冒されます。そして食うに食う物なく、拳銃には栄養失調になり、廃人同様に成り果てる。ただお国のためとは言え、頭を下げるだけで、「二度と患者護送はしない、お断りだ」と思いました。

帰隊すると准尉さんと呼ばれ、今度は「小倉の壕第一二五〇五部隊児玉中隊機関砲隊」への転属の命令でした。

この中隊は予備役の老兵集団（三十歳以上）で、

衛生関係は末松衛生伍長と私の二人でした。市内に外出して衛生用器具や医薬品を購入し、夕刻に帰営すると、営内は「藻抜きの殻」で全員移動を開始していました。

直感で「これはもう駄だ！」といって衛生伍長と駅に向かって走り出しました。既に駅前の広場には部隊が整列していて、列車の到着待ちの状態でした。

昭和十九年三月二十二日、博多湾に日は落ちて、夕闇が迫るころ、列車が静かに入ってきました。半分が軍隊用、後半分が民間人用でした。乗車する。一切無言である。車内は電灯を消し窓を閉めていました。山陽本線を一路東へ走り、途中がどこかも分からず、ようやく「青森！青森！」の声で、本州北端の陸奥の国まで来ました。ここから青函連絡船で蝦夷の地へ渡りました。北海道の三月はまだ冬です。

思えば、自分たちは夏衣服を着用したままでいたのですが、これは防諜上の処置だったという

ことでした。なおも鉄路を北上し、三日間掛かった移動でした。「全員、下車！」の号令で北海道の大地に立ちました。

ここは三月というのに、雪がいっぱいで行軍中に「足元に注意せよ、転倒注意」などの声が聞こえます。

三月二十五日、北海道中央にある川上郡美瑛町に着き、ここでも雪上行進です。そして小学校のような建物を宿舎にしました。この時点で北部第一〇〇部隊の戦闘序列に編入されました。

四月十六日、出動命令が来ました。根室へ移動でした。急な移動のために宿泊などの施設がなく、一般民家に分宿となり、旅館を本部として、ここには各隊の指揮官が入りました。自分と衛生軍曹も一緒でした。

ここからの出航は極秘で、漁船を御用船とし、一隻に二十人くらいが乗り、幾十隻もの船を連ねて北の海に向かって進みました。歯舞島、色丹島、国後島、択捉島と進みました。これらの島の周辺

の海には、いまだ解けやらぬ浮遊している氷山が多く、船の航行には注意が必要でした。波浪は荒れ狂う北の海で、飛沫を浴びて一同ずぶ濡れとなります。自分は医薬品の保全に意を注ぎました。

択捉島の年萌港に着きました。港と言っても岸壁がなく、入り江の浅瀬があるだけです。荒い岩のある浜を股まで漬かっただけです。揚陸作業でした。そして小学校を借用して宿舎とし、不足分は校庭に天幕を張って兵舎にしました。荷揚げ作業は食料、弾薬、機材、医薬品などを揚陸して無事に終了しました。そして今度は、そこから数百メートル奥地にこれらの揚陸諸物資を運び、それらを格納するため山裾に横穴を掘るのですが、砂地のため白樺と熊笹を使って建設しました。建設に当たっては、入隊前建設職に経験のあった兵隊が中心となって建設にあたりました。建設が終わって、その後、幾日ぶりかで休日となりました。

根室を出港以来、全力での労働でした。択捉の雪の丘に立って四方を眺めると空は真っ青で、海

も穏やかで、足元は白雪の丘でした。

ここでは六月下旬から九月上旬の間が春・夏・秋で、九月になると冬で雪が来ます。僅かこの三カ月ほどの期間に草木は花を咲かせ実を結ぶのです。

そして軍事訓練ということもなく、まして衛生兵は気楽なものでした。そして北辺の守りだといって本科の兵隊さんは頑張っていました。択捉島には年萌湖という大きな湖があり、鮭が小川を真っ黒になって遡上してきて、素手でつかみ取って食料にしました。浜では漁師が「兵隊さん、食べ下さい」と山ほどの魚を持ってきてくれます。これは戦時中とは思えない光景でした。捕鯨船の活動も初めて見ました。体長十メートル余りの大きな山のような鯨でした。北の海は日本の生命線だと思いました。

陸軍も食料事情が悪くなり、北方守備隊も食料は現地調達せよということになりました。魚類は十分あるが野菜が不足し、乾燥野菜と粉末の醤油

や味噌でした。七、八月ごろには野蒜などの山野草が路傍に芽を出し、我先にと競って採り、飯盒で一人でこっそり炊いて食したものです。

昭和二十年六月六日、内地への移動の命が下りました。小型船舶、機帆船で択捉島の年萌港を出港しました。天気は文字通り晴朗で、風なく鏡のような北太平洋の海でした。一年前と同じ根室港へ上陸、休憩の後列車に乗り、車内で寝ている間に本州へ帰ってきていました。

六月二十日、「埼玉県北埼玉郡三田ヶ谷村の小学校を兵舎とする帝都防衛隊として勤務」の命令で、東武「杉戸駅」に下車、隊伍を整えて行進、三田ヶ谷小学校に到着しました。ここでは多数の民衆の出迎えを受けました。

広い関東平野で三六〇度地平線まで一望でき、風格のある家がぼつぼつ建っている。裕福な家庭だろうか防風林が家の四周に植えてあります。

村人は親切で、風呂は民家に交代で行きました。ちようど、農家は田植えの最中で、隊員全員で農

家の手助けにも行きました。

八月になり、隊長から訓示があり、「優勢な敵が九十九里浜に上陸するかも知れない。そのときには九州男児の精銳が帝都を死守するのだ。全隊員は一両日中に親子兄弟に会ってこい」とのことでした。

自分は八月十日早朝に部隊を出発、杉戸駅から乗車、東海道から大阪、岡山へと西へ来るほどに異様な状態に気がつきました。首、顔といわず全身が焼けただれた幾十人もの人に出会いました。これは米軍の原子爆弾投下による被害でした。これらは知らせなかったということのようでした。衆には知らせなかったということのようでした。車窓より望むと広島に近づくにつれすべてが灰燼に帰している。列車はごどん、ごどん、と進みます。四日前の八月六日朝に受けた無惨な原子爆弾、正視できない惨状でした。

久留米に到着しましたが筑後川の鉄橋が空襲により破壊されて不通、そのため徒歩で佐賀に行き、

瀬高行き最終列車に飛び乗り、高柳まで再び徒歩でした。真つ暗な田舎道を軍靴の音を響かせて家路へと急ぎました。

家では両親と兄弟に会いました。父は「まだ千島列島にいたのか」というが、軍隊の移動は一切極秘で、択捉島や北海にいたことは知らされず、ただ風の便りで知るだけだったようです。

一日ゆっくり静養し、八月十五日、朝一番列車で本隊に帰るべく出発しました。その時は「これが本当の親子、兄弟の別れになる」との思いがありました。久留米駅を通過したころ、「正午に重大放送がある。国民は聞くように」とのことです。二日市に列車が停車していたときに、天皇陛下の玉音放送がありました。

「畜生、日本は負けたのだ」。そんな思いで日本人は皆泣きました。

そして十六日の夕方、本隊に帰着しました。すぐに、すべての火器、兵器、軍需物資を取り揃えて、員数を報告せよ、とのことでした。我々は「散

り行く花清く」と「九州男児の誇りだ」との思い  
いっぱい、最後の整理を行いました。他県から  
来ていた兵隊は、夜逃げのごとく去ってゆきまし  
た。

八月十八日、軍令「陸甲第一一六号」により壤  
第一二五〇五部隊に復員が下令され、九月十三日、  
復員完結、解散、帰郷となりました。

そして九月十四日、満員列車に乗って故郷へ向  
かいました。部隊長から「戦後の復興のため努力  
せよ」との言葉がありました。

帰郷してからは産業組合に復職しました。

## 内地二年の軍隊生活

大分県 広瀬 成光

私は大正十四（一九二五）年七月一日、現在の  
大分県豊後大野市千歳町に生まれました。地元の  
小学校の高等科を卒業した後、香川県立農事講習  
所を卒業しました。当時、父は町役場に勤務して  
おり、母は家事はもちろん、我が家の農業にも主  
として従事していました。それで私もできうる限  
り余暇を見つけては農業の手伝いを行い、母を助  
けておりました。

当時は「産めよ、殖やせよ」の時代で、子沢山  
が奨励、提唱され、我が家でもご多聞にもれず十  
一人の子供が健在で、国から「多子家庭」として  
表彰を受けることが出来ました。大分県では我が  
一軒のみでした。

徴兵検査は昭和十七年で、甲種合格となり、翌  
十八年四月十日に大分の歩兵連隊第七中隊に入隊、